ドクターズアテンション―インタビュー

在宅療養支援病院として地域包括ケアシステムを実現

社会医療法人 誠光会 淡海（おうみ）ふれあい病院（滋賀県草津市）病院長 平野 正満

「淡海ふれあい病院」は2020年10月に設立されました。2021年10月には、隣接する草津総合病院が「淡海医療センター」と名称変更されました。420床の急性期病院である淡海医療センターに対し、淡海ふれあい病院は、一般病床100床（地域包括ケア病棟）・療養病床99床（医療療養病棟）の計199床の回復期・慢性期病院です。社会医療法人誠光会は、急性期と回復期・慢性期の両病院で、地域の方々の健康を守っています。今回は、淡海ふれあい病院の平野病院長にお話を伺いました。

――病院設立から、この10月で3年になりますね。

淡海ふれあい病院を作る時に、「ふれあい」の4文字にこだわりました。1つには「患者さまとのふれあい」です。2つ目は「地域とのふれあい」、そして3つ目には病院内での「職員同士のふれあい」です。この3つが、この回復期・慢性期病院の「核」です。例えば急性期医療というのは、病気を診断し治すところから始まります。病気を治すことによって、その患者さんを社会復帰させます。ところが慢性期医療は、手術など急性期の治療は終わったけれど療養が必要な方、高血圧や糖尿病の治療で服薬しながら生活している方、在宅療養の方などの、入院や外来診療を行っています。高齢者や認知症の方にも寄り添っていかなくてはなりません。これが治し、支える医療です。支えていくためには「ふれあい」が必要です。寄り添って在宅に戻れるように導く、幅の広い医療だと言えるでしょう。治療者自身の人間性も問われるほどの心のこもった医療を私たちは心がけています。こういったところから「ふれあい」を病院名に入れました。

そして、「淡海（あわうみ）」は、万葉集にも登場する琵琶湖を指す国名でした。これを「おうみ」として病院の名前に用いています。地域の方にも「淡海（おうみ）ふれあい病院」という名称を喜んでいただいています。

基本理念の「安心と優しさ」は地域からの信頼に大切な病院機能

病院の基本理念は『地域の人々に信頼され、社会から必要とされる、安心と優しさの溢れる病院を目指します。』です。まず「地域の住民から信頼される病院」となること。そして「地域から必要とされる病院であり、さらに存続し発展を続ける病院」そのための条件が「安心と優しさの溢れる病院」です。安心というのは患者さんが感じる安心です。優しさは職員が提供する優しさです。安心と優しさが病院にとって一番重要な役割です。しっかり提供して、地域から信頼されて必要とされるような病院になるということです。

法人としての理念は、『誠心誠意を尽くし、一隅を照らす光のごとく　人々に幸せをもたらす活動を行う』ですので、この理念とも合致できるように考えています。「一隅を照らす」というのは、与えられている今の仕事や責任をしっかり果たすことによって病院、社会、国が成り立つという考え方です。人々に幸せをもたらすことができるような医療や社会活動を目指しています。

回復期・慢性期に特化した病院

淡海ふれあい病院は滋賀県で58番目の病院です。草津総合病院の流れは汲んでおりますが、新しいタイプの病院です。回復期・慢性期に特化した病院としてゼロからのスタートでした。病院の収入は主に入院基本料ですが、病院の実績に応じて点数や料金が設定されます。最初は実績がゼロですから最低レベルの設定から始まり、当初は大赤字でのスタートでした。コロナ禍の影響もありましたが、現在では利益率が15％以上を維持できるまでになりました。

地域包括ケア病棟とじん臓病センターが2本柱

この病院の特徴は2つあります。1つは地域包括ケア病棟（回復期病棟）です。全国的には40床前後が平均と言われていますが、当院には100床あります。地域包括ケア病棟は入院基本料の設定が高いので、9割以上の稼働率で運営すると病院経営は安定します。地域包括ケア病棟はこれからの地域医療を支える病棟で、地域包括ケアシステムを推進して実践する病棟です。これからも増え続ける在宅医療を支え、「時々入院、ほぼ在宅」を目標としています。

地域包括ケア病棟は、私が院長をしていた草津総合病院で導入しました。地域医療構想による病院機能分化が提唱され、病院や病棟の機能の明確化が求められていた時期です。草津総合病院にはDPCⅡ期・Ⅲ期にあたる亜急性期の患者さんが多く入院されていました。この患者さんの受け皿として地域包括ケア病棟の導入が決定されました。

当然、急性期病棟の一部を地域包括ケア病棟（回復期病棟）に変換することには多くの反対がありました。この病棟の必要性とメリットを説明しながら50床から100床まで増床することができました。現在この病棟を淡海ふれあい病院が引き継いでいます。

もう1つの特徴は「透析」です。当院にはじん臓病をあらゆる段階で治療する「じん臓病ケア総合センター」を併設しています。その中心となるのが血液透析で70台の機器が稼働しています。その数は滋賀で一番であり、自宅からの送迎も行っています。今後益々患者が増えると予想しています。

以上2つが病院経営の基盤になっています。

かかりつけ医機能を持った中小病院

当院の外来を受診されるのは、一般に慢性期の患者さんです。慢性期の患者さんは複数の疾患を有し、定期的な通院が必要な高齢の方ばかりです。淡海医療センターのような急性期病院は病気を治すことが大きな役割です。通常、病気が治れば通院することはありませんし、紹介先の開業医の先生に戻ることになります。一方淡海ふれあい病院では、じん臓病や糖尿病などの治りきることが難しい慢性期疾患を抱える患者さんが通院されています。病気の相談にのったり、急な受診、場合によっては入院も必要となります。病院の外来では血液検査や心電図、CT検査などを迅速に実施でき、緊急入院にも対応できます。さらに専門的な診療を要する際には、隣の淡海医療センターへの紹介も可能です。当院はあらゆる場面での医療ニーズに対応できる理想的なかかりつけ医機能を発揮できるのです。

私は外科医でしたがすでに手術は行いません。私の手術を受けた患者さんが今なお外来に受診されますが、「私は総合診療医です。あなたのホームドクターです」と言っています。かかりつけ医というと開業医の先生のイメージですが、国はこれからは中小病院もかかりつけ医機能を持ちなさいと主張しています。かかりつけ医機能は、当院のような地域密着型病院にはとても重要な役割と考えています。

淡海ふれあい病院を今後どう発展させていくのか

医療には、外来の医療、入院の医療、在宅の医療があります。今後、外来や入院の患者数は確実に減っていきます。高齢化が進み人口も減って、既に外来患者が減りはじめている地域があります。入院も地域格差はありますが、全体的に減少していきます。一方、在宅の医療ニーズは量的、質的に益々高くなっていきます。そこにどのように関わっていくか、大きな課題だと思っています。医師・看護師が行う「訪問診療」をどう充実させるか。「訪問看護」「訪問リハビリ」のステーションを病院の中に設置することも必要です。当院は「在宅療養支援病院」ですが、その施設基準として訪問診療や訪問看護、訪問介護の実績の蓄積が必要です。今後、地域を支えていく病院として、医療、介護、生活支援の水平連携を推進していきたいと考えています。

私たちには地域共生社会の実現という大きな目標があります。その具体的な行動として、地域包括ケアシステムを推進しながら、この地域でのまちづくりへの参画があります。医療者はもっと地域に出ていき、地域のニーズを掘り起こしながら、自分たちに何ができるか、創意工夫していくことが大切です。

私たちの今年度の新たな取り組みとして「地域包括支援センター」運営協議会への参加と「介護予防支援事業」への参加を始めました。どちらも地域密着型病院として担うべき役割であり、病院あるいは医療という視点から病院資源をどのように提供、活用すべきかを考えていきたいと思います。

超高齢社会が進展するなかで、慢性期医療のニーズは確実に高まってきます。外来、入院、在宅のそれぞれのステージにおいて、淡海ふれあい病院の活躍の機会は増えてきます。高齢者医療、地域医療を支えるのは私たちの病院であるという使命感と責任感をもってこの病院の運営にあたっていきたいと思います。

◆平野 正満（ひらの まさみつ）プロフィール

1980年　東海大学医学部卒業
1988年　滋賀医科大学大学院医学研究科修了 医学博士
1989年　滋賀医科大学第2外科 助手
1999年　滋賀医科大学第2外科 講師
2002年　草津総合病院（現・淡海医療センター）副院長
2014年　草津総合病院 病院長
2020年　淡海ふれあい病院 病院長

日本消化器外科学会 消化器外科 指導医・消化器外科専門医
日本外科学会 指導医・外科専門医